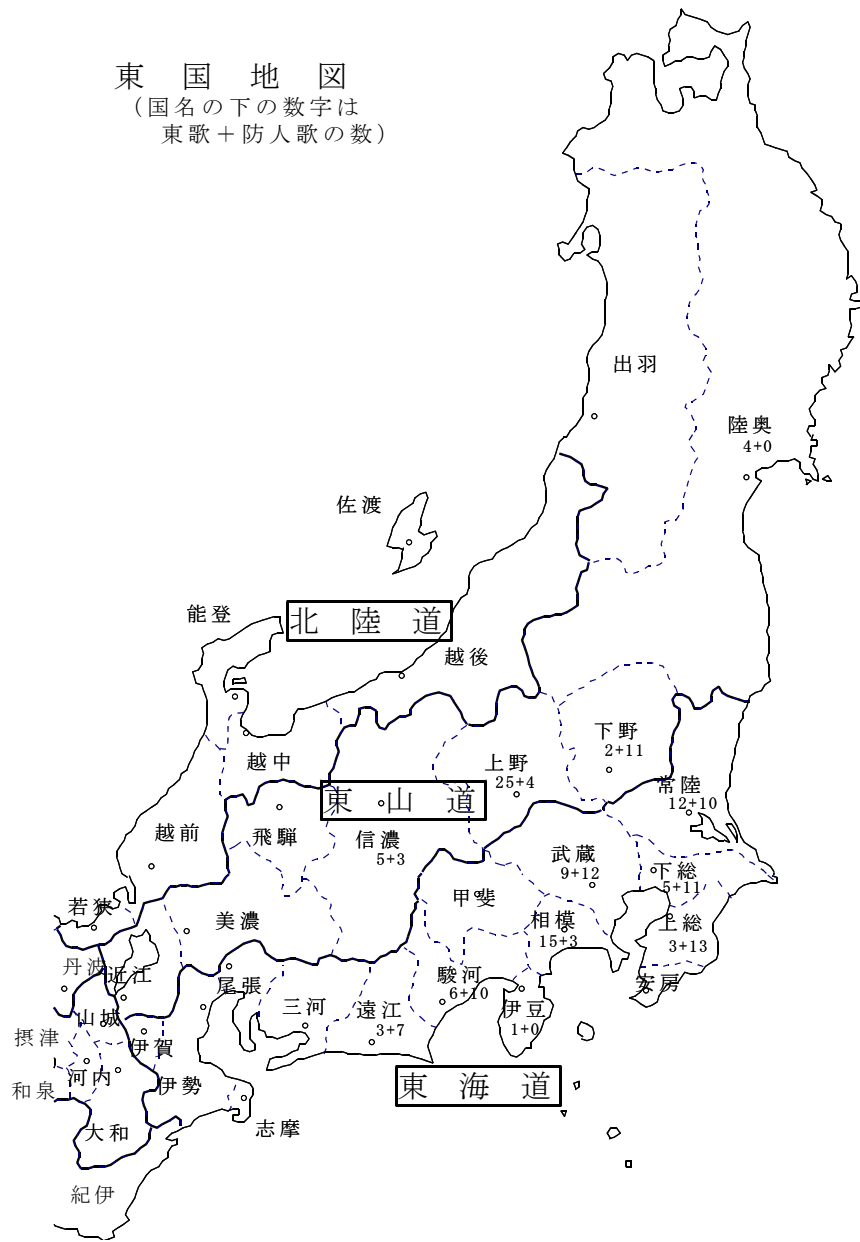


「万葉集」上野国東歌をよむ

平成二十二年十月二十日  
伊勢崎市赤堀公民館

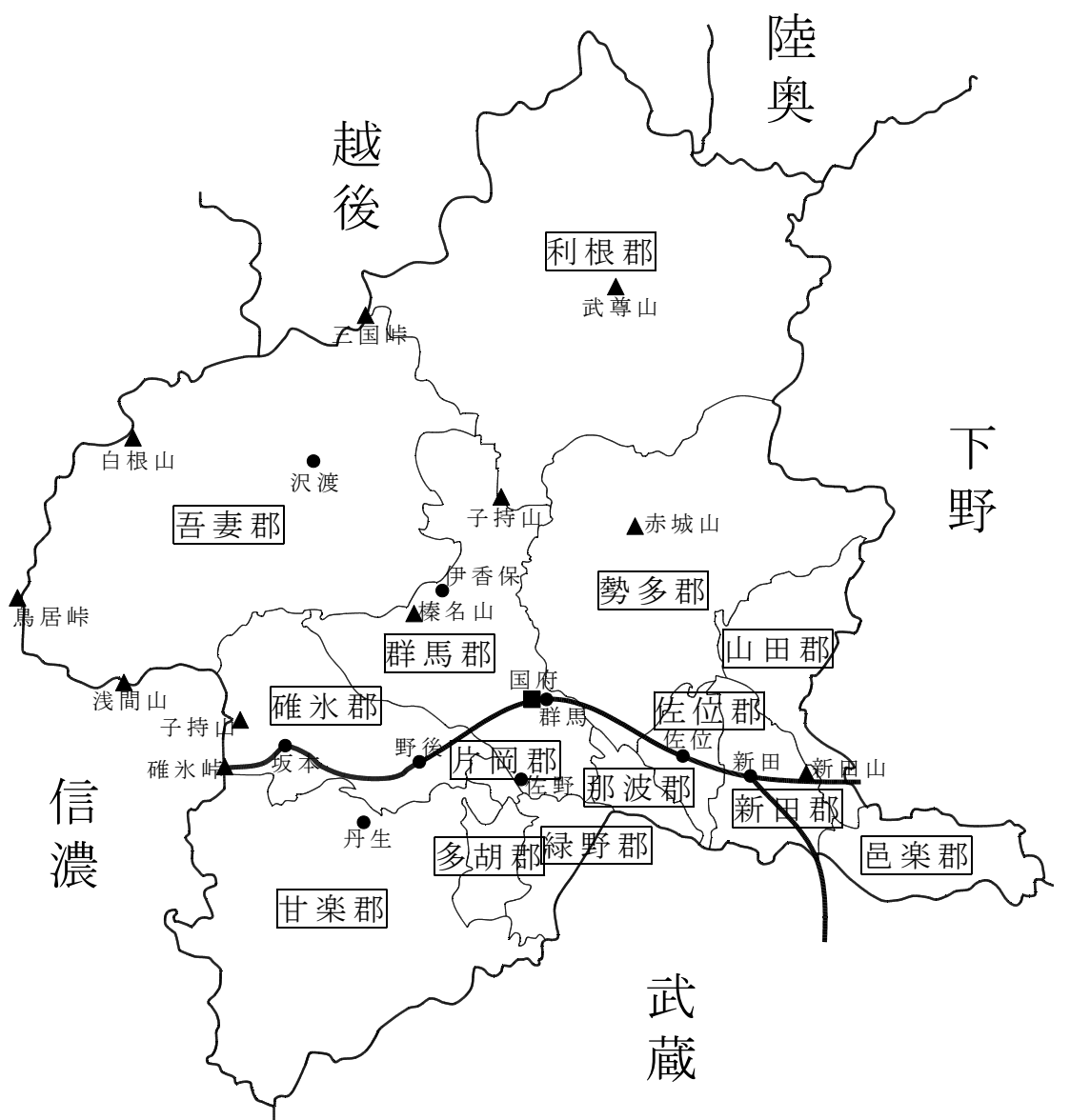
群馬県立女子大学 北川和秀



◎参考

太政官奏すらく、「武蔵国は山道に属ると雖も、兼ねて海道を承けたり。公使繁多くして祇供堪へ難し。その東山の駅路は上野国新田駅より下野国足利駅に達する。此れ便道なり。而るに枉りて上野国邑楽郡より五箇駅を経て武蔵国に到り、事畢りて去る日に、また同じき道を取りて下野国に向ふ。今東海道は、相模国夷参駅より下総国に達するまで、その間四駅にして往還便ち近し。而して此を去り彼に就くこと、損害極めて多し。臣ら商量するに、東山道を改めて東海道に属らば、公私所を得て、人馬息ふこと有らむ」とまうす。奏するに可としたまふ。

〔続日本紀宝亀二・一〇・二七〕



※郡界は寛文八年（1668）の上野国郷帳の村名に基づき推定した。

◎上野国の東歌

3421 伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ

伊香保の峰に雷よ鳴ってくれますな。私にとっては別にどうということはないのですが、あの娘が怖がるものでね。

3422 伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり

伊香保風は、吹く日も吹かない日もあると言いますけれども、私があなたを思う恋心ばかりは、止むときがありません。

\*参考「韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし」(三六七〇番)

3403 吾が恋は現在もかなし草枕多胡の入野の将来もかなしも

私の恋は今も切ない。そして(多胡の入野の奥ではないが)将来も切ないことです。

3423 上毛野伊香保の嶺ろに降る雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり

上野国の伊香保の峰に降る「雪」ではありませんが、たやすく「行き」過ぎることができない、あなたの家のあたりよ。

3405 上毛野乎度の多杼里が川路にも子らは逢はなも一人のみして

上野国の乎度の多杼里の川へ行く道で、あの娘が逢ってくれたらなあ。一人だけで。

3405 或本 上毛野小野の多杼里が安波治にも夫なは逢はなも見る人なしに

上野国の小野の多杼里の安波治でも、あなたが逢ってくれたらなあ。誰にも見られないで。

3402 日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なのが袖もさやに振らしつ

碓氷の山をあなたが越える日は、あなたも袖をはっきりとお振りになりました。

3404 上毛野安蘇の真麻群かき抱き寝れど飽かぬを何どか吾がせむ

上野国の安蘇の麻の束を抱きかかえるように、あなたを抱き締めて寝ても、それでもなお満足できない気持をいったい私はどうしたらいいのでしょうか。

3414 伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の頭ろまでもさ寝をさ寝てば

伊香保の高い井堰の上に現れる虹がはっきりと見えるように、そのようにはっきりと二人の仲が明らかになってしまいうほど一緒に寝ていられたらなあ。

3413 利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす会へる君かも

利根川の浅瀬がどこなのかも考えずに、やみくもに渡って波を受けてしまったように、ばったりと出会ったあなたですこと。

3417 上毛野伊奈良の沼の大藺草外に見しよは今こそ益れ

上野国の伊奈良の沼に生えている(まだ刈り取る前)大藺草と同じように、あなたのことを傍らから見ていただけの頃よりも、恋人同士になった今の方が恋心は増していますものを。

3420 上毛野佐野の舟橋取り放し親は離くれど吾は離るがへ

上野国の佐野の舟橋をばらばらにしてしまうように、親は二人を引き離しますけれど、私はあなたと離れたりしませんよ。

上毛野佐野田の苗のむら苗に事は定めつ今はいかにせも

上野国の佐野のたんぼの苗を使った占いで結婚を決めました。今さらどうにかできましようか。(できないでしょう。)

上毛野佐野の茎立ち折りはやし吾は待たむる今年来ずとも

上野国の佐野の青菜を折ってお料理を作り、私はお待ちしますわ。たとえあなたが今年はいらっしゃらなくとも。

多胡の嶺に寄網延へて寄すれどもあにくやしづしその顔よきに

多胡の峰に引き綱を掛けて引き寄せるように、頑張つて言い寄つてみたけれど、ああ、憎らしいよ、水底に沈んでびくともしない石のようなやつめ。(ちつとも靡かないでさ。)いくら顔が美しいからって。

◎上野国の可能性のある歌

子持山若鶏冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は何どか思ふ

子持山の若いカエデの葉が秋になって色づくまで、あなたと共寝をしていたいと私は思います。あなたは どう思います？

左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒が足掻きを速み言問はず来ぬ

左和多里の乙女に出逢ったけれど、私が乗る赤毛の馬の歩みが速いので、言葉を交わさないまま来てしまいました。

◎上野国の防人歌

難波道を行きて来までと吾妹子が着けし紐が緒絶えにけるかも  
右の一首は、助 丁上毛野牛甘のなり。

わが妹子がしぬひにせよと着けし紐糸になるとも吾は解かじとよ  
右の一首は、朝倉益人のなり。

わが家ろに行かも人もが草枕旅は苦しと告げ遣らまくも  
右の一首は、大伴部節麻呂のなり。

ひな曇り碓日の坂を越えしだに妹が恋しく忘れぬかも  
右の一首は、他田部子磐前のなり。  
二月二十三日に、上野国の防人 部領使 大 目正六位下上毛野君駿河が進める歌の数  
は十二首なり。但し拙劣なる歌のみは取り載せず。